

現代ロシアの若者が抱くソ連時代に対するイメージ  
—インタビュー調査の結果—

Images of the Soviet Past Amongst the Younger Generations  
in Contemporary Russia: Interview Survey Results

ムヒナ・ヴァルヴァラ  
Varvara MUKHINA

**Abstract**

More than a quarter of a century has passed since the dismantling of the Soviet Union. However, the interest in the Soviet past is on the rise in contemporary Russia. Many restaurants have interiors decorated with symbols from the Soviet period; moreover, a large number of retro television series has been broadcasted recently, and many people are participating in thematic social media communities, making use of the symbols of the epoch. At the same time, previous research has demonstrated that most Russians have an ambivalent image of the Soviet past, recollecting both positive and negative aspects of the former Soviet Union. This is true for the generations who lived in the Soviet Union, those who were born in late Soviet era, as well as those born after the dismantling of the USSR.

The process of the USSR image construction cannot be understood without understanding the principles pertaining to the recollection of the past. People choose to remember some episodes and forget others. Moreover, those who lived during the period rely on their memory to ‘recollect’ the past. In contrast, those who did not, have to depend on some different sources of information about the epoch to ‘reconstruct’ it. The aim of this study is threefold: first, to clarify how the Soviet past is reconstructed by the younger generations. Second, to reveal the element of the Soviet past, which construct their images of the

period. And, third, to investigate the sources of information they rely on.

The study consists of two series of in-depth interviews in Saint Petersburg ( $n=20$ ) and Vladivostok ( $n=18$ ). Twenty-one respondents under the age of 34 (Saint Petersburg=12, Vladivostok=9) were identified for this study. Those under the age of 34 were born in the late period of the Soviet Union and entered elementary school at the moment of its dismantling, or they were born after the dissolution of the Soviet Union. Therefore, they were socialised after the dismantling of the USSR.

Based on the analysis of the interviews, three groups of respondents were identified: those with positive, negative, and ambivalent images of the Soviet past. The respondents mentioned positive features of the Soviet past, including the national idea that united the nation, moral values, social security, and stability, amongst others. They named negative ones as well, such as repression, the executions that took place under Stalinism, propaganda, isolation, and the lack of goods. The young respondents reported receiving information about the Soviet Union mostly through interactions with elder relatives and family members, as well as the films and songs of the period, books and history documentaries. The data indicate how the younger generations reconstruct their understanding of the Soviet period through their interactions with the elder generations. Some of them internalise the interpretations of the elder generations, which results in the reproduction of interpretations of the Soviet past between the generations. Others use the memories of previous generations as a starting point for their conceptualisation. They compare those memories with their own current situations and make their own interpretations of the Soviet past. The results of the study help us to understand the mechanism of the interpretations of the Soviet past amongst the younger generations in contemporary Russia.

## 1. はじめに

ソ連解体以降、四半世紀以上経過したが、近年のロシアにおいてはソ連時代に対する関心が高まっている。ソ連の国章の一部である鎌と槌やガガーリンの肖像がレストランやバーに飾られており、ソ連末期時代の日常生活用品および歌手や政治家の肖像なども、飲食店のインテリアで使用されている。また、ロシアではカフェやレストランにソ連時代を連想させる名前が見られる<sup>1</sup>。SNS コミュニティでもソ連に対するノスタルジック的なビデオが流行しており、ソ連の日常生活用品や映画のスクリーンショットなどの写真をアップロードし、その感想を語り合う SNS グループも多数存在している。

過去への関心というものは、ロシア独自の現象ではなく、他の国々でも見られるものである。例えば、高岡（2007）は日本の観光業界などにおける昭和ブームに注目し、そのメカニズムについて論じている。昭和30年代に少年時代を過ごしていた、いわゆる「団塊の世代」が定年退職を控え、その時代に対するノスタルジーを覚えるようになった。「東京タワーが完成し、1964年の東京オリンピックへ向け交通網が整備され、大型ホテルが林立し、空き地はビルに代わり、長屋は団地へと変貌する」その時代は、1990年代以降の「失われた20年」に比べ、「古き良き時代」として回顧され始めた（高岡、2007：120）。

ロシアの話に戻ると、「レヴァダ・センター」の世論調査の結果によれば、「ソ連の解体について残念に思う」人が過半数を超えている。その質問に対して、1992年に66%、2000年に75%、2008年に60%、2012年に49%、2017年に58%、2018年に66%が「そう思う」と答えている（Левада - центр, 2017; 2018）。一方、回答者の年齢構成を見ると年齢が下がるにつれてソ連解体を残念に思う人が少なくなる傾向がみられる。ソ連末期に生まれた回答者（2017年現在、25 - 34歳）の中でソ連解体を残念に思う人とそう思わない人の割合は同じであり、ソ連解体後に生まれた人（2017年現在は18 - 24歳）の中では、「残念に思う」の20%に

1 例えば、モスクワのレストラン「ソ連」（Ресторан « СССР »）、サンクトペテルブルクのバー「ソ連」（Бар « СССР »）、ニジニ・ノヴゴロドのカフェ・バー「ソ連」、ソ連のスローガン「民族友好」を思い出させるウラジオストクのバー「友好」（Бар « Дружба »）などがある。

対して「そう思わない」が42%を占めている<sup>2</sup>。このデータから、近年のロシアにおいて、若者の意識が年齢の上の世代とは少し変わりつつあることが窺える。本稿では、次のようなことを明らかにしたい。一つ目は、ソ連末期およびソ連解体後に生まれた世代がソ連時代に対して抱いているイメージである。二つ目は、そのイメージを形成している要素である。三つ目は、ソ連に対するイメージが形成される際の情報である。

## 2. 問題の所在

過去を捉えるに当たっては記憶の作用を理解する必要がある。ザヴェルシンスカヤによれば、「ありのままの過去を留める記憶は存在しておらず、記憶はいつも過去の人工的な再現である。その中で忘れられていることもあれば、選択され覚えられていることもある」(Завершинская, Завершинская, 2017: 16)。この引用から、全面的に過去を再現することは不可能であり、人々はそれぞれ、「過去」とされるものを様々な思い出から選択し、選んだものだけを「過去」として覚えていることが分かる。このような構築主義的なアプローチの視点からすると、「記憶は、過去から現在へと連続的に存在するものではなく、たえず現在の観点から再構成される」ものである(松浦, 2005: 29)。松浦によれば、記憶は、他者との関係の中で言葉を通じて語られることによって構築される(同上: 30)。また、過去の忘却は、アイデンティティ危機にもつながることがあるため、過去の回想は、個人のアイデンティティ形成に大きな影響を与える(同上: 4)。

本稿で「若者」として扱われるカテゴリは、自らはソ連時代を生きていなかった20-30代の者である。彼らはソ連解体後に生まれたか、もしくはソ連解体時に1-8歳であり、ソ連時代の教育を受けていない者、つまり、新生ロシアの最初の世代である。この世代は、ソ連時代の教育を受けていないことから、ソ連と少し距離を置いてその時代を見ることができると思われる。一方、このような「若者」は、自らの子どもの頃の記憶か、他の情報源に頼り、「過去」のイメージを構築せざるを得ない。

---

2 「レヴァダ・センター」の2018年のデータは、本稿を執筆した時点で年齢構成別の具体的な数字が公開されていないため、ここでは2017年のデータを使用することにした。

その意味では、ソ連時代を生きていなかった世代は、その過去を「回想」するのではなく、「再現」している。また、「若者」というのは、国の未来を担う者として、その考えによって今後、ソ連時代がどのように受け継がれていくかに影響を与える。そのため、ソ連の末期およびソ連解体後の世代が、「ソ連」という「過去」をどのように捉え、どのように「再現している」のかは興味深い問題である。

### 3. 先行研究

近年のロシアにおける過去の捉え方に関しては、ソ連に対するノスタルジーに注目する研究とソ連時代に対するアンビヴァレントなイメージに注目している研究がある。まずは、ノスタルジーについて述べたい。

#### 3-1. ノスタルジーについて

ノスタルジーという語は、17世紀末から医学用語として使われており、船員が故郷を懐かしむ精神的な状態を指していた。当時は、ノスタルジーを一種の精神障害としており、その意味での「ノスタルジー」という用語は19世紀末期まで使われていた。20世紀の半ば頃、「ノスタルジー」が人文科学の研究対象となり、人文科学の分野における「ノスタルジー」は故郷＝場所への懐かしさではなく、過ぎ去った過去＝時間に対する懐かしさという意味で使われるようになった（松浦、2005:6;Абрамов, Чистякова, 2012:52-53)。また、20世紀には、ノスタルジーは精神障害ではなく、社会的に構築された感情として論じられるようになった。このような感情は知識と異なり、必ずしも体験に基づいたものではない。つまり、自ら体験していないものや時間に対してもノスタルジックな感情が生じることがあるとされる。

ザヴェルシンスカヤらは、近年のロシアにおけるソ連ノスタルジーに注目している。彼女らによると、90年代の経済改革はロシア社会に大きなトラウマを植え付け、ソ連に対するノスタルジーがそのトラウマを癒す手段になっていると説明している（Завершинская и Завершинская, 2017)。1980-1990年代は、ソ連の歴史においてそれまで公開されていなかった出来事に民衆の興味が向けられたが、2000年代になるとソ

連時代の「神話」への要求が高まったとされる。なぜなら、ソ連解体以降の経済的な改革は、社会的格差を生み出し、その改革でベネフィットを得たのは人口のわずか20%だったからである。それに対して改革の結果、40%は生活水準が低下したとされる（Очкина, 2012 : 53）。したがって、「トラウマを被ったロシア社会は、新しい価値観に適応できず、美化されたソ連時代の過去を支点」（Завершинская и Завершинская, 2017:16-17）としたため、ソ連に対するノスタルジーが高まった。その説によると、近年のロシアは、科学、スポーツ、宇宙開発などの分野においてソ連が収めた成果を超えることができず、それはソ連の理想化の原因となり「大国時代」を恋しく思う気持ちを促進させた。そのような中、ソ連時代は「優れた成果」、「真の価値観」、「社会正義」、「集団主義≠個人主義」、「インターナショナリズム」、「民族友好」の時代として回顧されるようになった（Завершинская, Завершинская, 2017:17; Очкина, 2012 : 56）。

### 3-2. ソ連時代に対するアンビヴァレントなイメージについて

エトキンドは、ソ連時代についての記憶（スターリン時代の大粛清、迫害など）を、ドイツにおけるファシズム時代についての記憶と比較している（Etkind, 2013 : 196-219）。彼の意見によると、ドイツにおいてはその時代に対する共通の反省的認識が形成されているのに対し、ロシアにおいてはソ連時代についての共通意識が存在していない。その理由として、次のような特徴を挙げている。一つ目は、ソヴィエト連邦の歴史はナチス政権に比べて長く、また、ソ連解体後経過した年数が比較的浅いことである。第二は、ソヴィエトの大粛清の犠牲者は、ナチス政権の犠牲者より社会的な背景が多様であり、その子孫の間にも統一した記憶が存在せず、それらが一丸となって声を上げることができないことである。第三は、戦後のドイツの改革が敗戦によるものであったのに対し、ソ連解体はソ連政府により決定されたことである。つまり、ソ連解体後のロシアにおいては外部からの統治ではなく、国内での統治下で改革が実施された。第四は、ナチス政権の犠牲者は、人種・民族を根拠に迫害されており、当事者はその迫害の根拠に対して反対意識を持っていた。一方、ソ連における迫害の根拠は「国民の敵」であったことから、多くの犠牲者は自分が「国民の敵」とは思っていなかったが、「国民の

敵」に対する政府のスタンスそのものに対しては賛成した者も多かった (Etkind, 2013 : 196, 203-204)。また、ツィマーマンは、他のポスト共産主義諸国と同様、近年のロシアにおいては、以前の共産党のエリートが権力を握っているため、共産党時代の迫害などの犯罪が起訴されなかったことを指摘している (Zimmerman, 2018 : 73)。以上の理由から、ソ連時代の犠牲者を公式に追悼する機会がなかったことで、「過去」が「幽霊化」されてしまい、実際に存在したのか、しなかったのか不確実なものとなってしまった (Etkind, 2013 : 196, 207)。

2009年にトルクメニスタン以外の旧ソ連諸国の若者(18-30歳)を対象に行われた世論調査においても、ソ連時代に対する解釈の多様性が見られた (Мониторинг социальных настроений населения стран постсоветского пространства, 2009)。世論調査の結果は、旧ソ連諸国が持つソ連時代の解釈によってポジティブなイメージを持つグループ、相反する「アンビヴァレント」なイメージを持つグループ、ネガティブなイメージを持つグループの三つに分けられることを示している<sup>3</sup>。その調査結果では、ロシアはアンビヴァレントなグループに配置されており、ロシアの若者においては、ソ連時代に対してポジティブなイメージとネガティブなイメージが混在し、共通の認識が存在していないことが分かる。さらに、その世論調査で重要なのは、若者のソ連時代に対するイメージにおいて、ソ連時代を生きていた世代とソ連解体後に生まれた世代の間に差異が見られなかったことである。これらの結果から、調査者らは、ソ連時代に対するイメージがそれぞれの家庭において再現されており、年齢が上の世代から下の世代に受け継がれていると推測した。しかし、そのような「イメージの継承」のメカニズムは、世論調査の方法では明確にできなかった。

### 3-3. 過去の解釈におけるマスメディアの役割

マスメディアは、人々の「過去の記憶」の再現に大きな影響を与えて

---

3 ソ連の過去に対してポジティブなイメージを持つ国は、カザフスタン、ウズベキスタン、キルギス共和国、タジキスタンなど中央アジアの国である。アンビヴァレントなイメージを持つのは、ロシア、モルドヴァ、ウクライナ、アルメニア、アゼルバイジャンである。ネガティブなイメージは、エストニア、ラトビア、リトアニアのバルト三国とグルジア=ジョージアが抱いている。ベラルーシは、ポジティブなイメージとアンビヴァレントなイメージの間に位置している。

いると思われる。大塚によると、メディアは「時間そのものを断片化し、われわれを歴史的記憶喪失へと追いやっている。それゆえ、われわれは歴史的過去を、過去についてわれわれ自身がかつポップなイメージやステレオタイプを通してしか見ることができず、過去それ自体は永久にわれわれの手の届かないところにある」とされている（大塚、1992）。このようにして今現在も美化されず、「歴史的な過去」としても把握できない記憶は「架空の過去」を作り上げている。

ロシアにおけるソ連時代についての情報源としては、レオニード・パルフィオーノフの「ナメードニ：1961－1991年」（Леонид Парфёнов, «Намедни: 1961-1991. Наша эра»）という番組が重要な役割を持つと指摘されている（Абрамов, 2011; Абрамов, Чистякова, 2012; Фокин, 2016）。この番組は、ロシアで1990－1991年に第2チャンネル、そして1993－2004年の間はNTVチャンネルで放送され、人気を集めた。番組のコンセプトは、年代記の形で1961－1991年の政治外交的な出来事（「大きな歴史」）と日常生活の小さな変化、革新、ファッション、大ヒットした音楽（「小さな歴史」）を並行して映すことである。例えば、第1回の1961年をテーマにしたものでは、ループルの新貨幣導入、フルシチョフのトウモロコシ栽培キャンペーン、ガガーリンの宇宙飛行、女性ファッションにおけるピン・ヒールの大ブーム、ベルリン危機、3人のコメディアン（ヴィツィン、モルグノフ、ニクリン）の登場が放送された。つまり、この番組では、「大きな歴史」に重点を置かず、「大きな歴史」と「誰もが」懐かしく感じる「小さな歴史」の出来事を並行して語ることを通じてノスタルジックな感情を強化させるのが特徴であった。

ザヴェルシンスカヤらは、ソ連をテーマにした音楽番組、トークショーとドラマに注目している。ドラマの数は特に多く、2000－2010年の間に国営テレビチャンネルで放送されたドラマだけで90に上った（Завершинская и Завершинская, 2017: 14）。そのドラマには、時代の雰囲気を再現し、ドラマの人物の感情および日常的な困難の描写を通じて当時の暮らしを体験したかのような感情を覚えさせる効果がある。高岡の言葉を借りれば、以上のような番組およびドラマは、ソ連の「古き良き時代」のイメージを構築している。このようなドラマや音楽番組やトークショーなどが国営テレビチャンネルで放送されたのは、ロシア政府がソ連の過

去に対してポジティブなイメージを形成しようとしていたからと見られる。

また、プラヴディナは、ソ連時代の映画に焦点を当て、ソ連映画への需要の向上について論じている。プラヴディナによれば、2000年代はソ連映画の「ルネサンス」である。それらの映画は、ソ連時代に暮らした人々だけではなく、ソ連解体以降に生まれた若者にも人気を集めていると述べている（Правдина, 2009; Правдина, 2010）。インタビュー調査にもとづいて、プラヴディナはソ連映画の特徴として「質が高いこと」、「イデオロギー的であるが、優しく、ナイーブ」であることを挙げている。視聴者は、ソ連映画にはイデオロギー的なメッセージが強いことに気づくが、映画の中のナイーブな人物が共有している明るい未来への信仰と期待がノスタルジックな感情を引き出すことが指摘されている。ソ連時代の映画は、祝日に国営テレビチャンネルで放送されるため、意識的にソ連映画のDVDを購入する人も多い。プラヴディナによれば、ソ連時代の映画は、その時代に暮らした世代にとって共有体験の証となる。また、それらの映画を家族全員で鑑賞する習慣があるため、ソ連映画は世代間交流のきっかけとなると同時に、世代間の価値観および倫理規範の伝達ツールにもなる（Правдина, 2010）。ソ連時代の映画の中でもソ連をネガティブに捉え、批判する映画も存在する。しかし、それらの「悲劇的な」映画は、「大衆的」ではなく休暇を過ごすためには選ばれないと思われる。その反面、ソ連時代をポジティブに描く映画は、ノスタルジックな感情を引き起こし大衆の間で人気を集めている。

先行研究の分析から、近年のロシアにおいてはソ連時代に対する考えにノスタルジックなイメージと相反するアンビヴァレントなイメージが存在することが明らかになった。また、過去の再現においては、マスメディアの役割が指摘されており、ソ連時代を扱った歴史番組やドラマ、ソ連時代の映画が挙げられている。そこで、本稿では、サンクトペテルブルクとウラジオストクで実施したインタビュー調査の結果を分析し、ソ連時代に対するイメージ形成のメカニズムに焦点を当てる。具体的には、ロシアにおけるソ連の末期およびソ連解体後に生まれた世代のソ連に関する考えと、その考えを形成する要因および情報源を明らかにする。

#### 4. 研究方法

本稿では、2017年9月にサンクトペテルブルク ( $n=20$ ) および2018年2月にウラジオストク ( $n=18$ ) で実施したインタビュー調査のデータを分析した。調査は、近年のロシアにおけるアイデンティティ問題に焦点を当てたプロジェクトの一部である。本稿では近年のロシアにおける若者のソ連に対する考えに関連しているデータのみを紹介する。「若者」という概念は、定義が難しく、国、時代、個人により変わるが、本稿では、「レヴァダ・センター」の世論調査のカテゴリを参考に、最も年齢が低い二つのカテゴリを「若者」として定義した。一つ目のカテゴリは18-24歳であり、ソ連解体後に生まれた者である。二つ目のカテゴリは、25-34歳であり、ソ連末期・ソ連解体後に生まれた者である（Левада - центр, 2017）。全体として二つのカテゴリは、ソ連解体の際に小学校2年生以下の年齢であり、ソ連解体以降に社会化されたと言えよう。インタビュー調査の対象者の中で、該当する年齢カテゴリの対象者は、21人であった。二つのサンプルの特徴は下記の通りである。

サンクトペテルブルクのサンプルは、対象者数が12人であり（表-1）、男性が9人、女性が3人である。対象者の年齢は、18-34歳である。対象者の出身地は、サンクトペテルブルク（旧レニングラード）が7人、ロシアの地方部（チェリャビンスク）が1人、旧ソ連諸国（ベラルーシ、ラトビア、ウズベキスタン）が4人である。ウラジオストクのサンプルは、対象者数が9人であり（表-1）、男性が5人、女性が4人である。対象者の年齢は、22-34歳である。対象者の出身地は、ロシアの極東地域が7人、ウラル地方が2人である。

インタビュー調査を実施する前に、調査対象者に同意書と基本属性のデータを含めたアンケートに記入してもらい、インタビューを録音した。インタビュー時間は、サンクトペテルブルクのサンプルが12-63分の間であり、平均時間は28.6分である。ウラジオストクのサンプルはインタビュー時間が20-75分であり、平均時間は41.4分である。録音されたインタビューの文字起こしをした後、下記の三つの点に注目して分析を行った。それらは、①ソ連時代に対する評価、②ソ連のイメージを形成する要素、そして、③ソ連時代についての情報源である。



## 5. データ分析

表-1が示すように、全ての対象者をソ連に対する評価によって三つのカテゴリに分けた。一つ目のグループはソ連に対するポジティブなイメージを有するグループであり、「今のロシアには足りないところもある」、「今のロシアには真似すべきところがたくさんある」などの意見が述べられている。二つ目のグループは、「アンビヴァレント」な考えを示し、ソ連時代のポジティブな面（「社会的安定性」「手ごろな教育」「平等」「仕事の保証」「ロシアの高い政治的地位」など）とネガティブな面（「迫害」「経済的な発展の遅れ」「グラーク収容所」「プロパガンダ」など）の両方を意識し、相反するイメージを抱いている。三つ目のグループは、ソ連に対するネガティブなイメージを持ち、連想するものとして「冷戦」、「商品不足」、「貧困」、「迫害」、「虐殺」、「血まみれの戦争」、「非人道的な産業化」、「発展の停止」、「全体主義」などの極めて否定的なキーワードを挙げ、「その時代に暮らしたくない」と語っている。本節では、それぞれのグループの具体例を示しながら分析のプロセスを提示する。

### 5-1. ソ連に対するポジティブなイメージ

まず最初に、ウラジオストク生まれの26歳の男性（VNさん）の語りを紹介したい。VNさんは、人々を統一させるソ連時代の「正しい価値観」について語り、「ソ連」と「今のロシア」を比較している。なお、VNさんにとって、現代ロシアの「正しくない」価値観は西洋から受け取った価値観として捉えている：

Case 14 Vlad (M, 26, VN)

インタビュアー：今はソ連に対してどう思っていますか。

対象者：とてもポジティブに感じています。

インタビュアー：どのようなイメージがありますか。

対象者：共同体。共同体、人生の目標の統一性、生き方の正しさ、価値観(приоритеты)の正しさ、それは一般の人々の人生の中ですよ。つまり、私はソ連に対してとても好感を持っています。今のロシアには真似すべきところがたくさんあります。

インタビュアー：例えば？

対象者：社会のために生きること、共に生きることへの理解です。今は、皆、個人的利害の立場で生きています。皆、自分のことしか考えていません。それは、あまり正しいことではありません。それは西洋のモデルにととても似ていると思います。このモデルにおいては、ある人が他の人を犠牲にして成功することが許されています。ソ連のモデルの中ではそれは[倫理的な視点において-筆者注]正しくありませんでした。そのようなこともあったけど…私の母は、当時暮らしていた町が一番のお金持ちの人の娘と同じ学校に通っていた。その子の父親は、とても高い地位の職についており、一番のお金持ちでした。そしてその人の娘が、私の母と隣の席でした。それはとても正しい[社会体制だ-筆者注]と思います。もちろん生活水準は違いましたが、同じ学校に入学する機会、一緒に勉強する機会がありました。二人は、一緒に同じ学校を卒業し、それぞれ入りたい大学に入りました。将来、どの大学に入れば稼げるかを考えなくても良かったからです。それは、とても正しい[社会体制だ-筆者注]と思います。[教育やキャリアなどの-筆者注]全てに対しアクセスができました。だから、私はソ連に対しては良いイメージしかありません。とはいえ、歴史をよく見れば、ソ連が形成されたときは私の先祖みたいに多くの人が傷つけられました。私の先祖は、とても苦勞しました。たくさん犠牲者を出して建てられたのです、私の先祖も含めて…しかし全体的に私は、正義が最終的に勝ち取られたと思います。全てが、正しかった。なので、私はソ連に対して良いイメージしかありません。

VNさんにとっては、「正しい」という言葉はソ連時代に対するイメージのキーワードになっている。VNさんは母親の子どもの頃の話为例にして、ソ連の体制のメリットについて語っている。その話は、母親から直接聞いた話であると考えられる。そしてVNさんは母親の思い出を現在のロシアの事情と比較し解釈している。VNさんの母親の友達は、父親が「高い地位の職に就いて」おり、「一番のお金持ち」であったと述べている。しかしソ連時代は経済的な格差がそれほど存在しなかった。その友達の父親は共産党の官僚、つまり社会主義のエリート層（ノーメンクラトゥーラ）の一人であったと考えられる。ノーメンクラトゥーラは、収入が高かつ

たわけではないが、権力およびコネクションを持っており、不足している商品へアクセスできた。しかしVNさんは、その事情を経済的格差が広まっている現代のロシアの事情にたとえ、「一番のお金持ち」であったと解釈している。現在、富裕層の多くは、子どもを私立のエリート学校に通わせている。そのため当時のエリート層の女の子がVNさんの母親と同じ学校に通っていたことが、社会的な「正義」として捉えられており、「とても正しい」ことであると解釈されている。また、職種による給料の格差は、現代のロシア程大きくなかったため、大学への進学の際に、将来見込める給料ではなく、興味のあることを優先できたことを「正しい」社会の体制として捉えている。VNさんの先祖の中には、ソ連時代に迫害に遭った者もいたが、VNさん自身は個々人の利害より、社会全体の利害を重んじており、家族の歴史において、そのような出来事があったことはソ連時代に対するイメージ全体に影響を与えていない。

次に、大学生の頃にベラルーシからサンクトペテルブルクに移住した34歳の女性SCさんの事例を紹介したい。SCさんの語りでは、上述のVNさんの語りと異なり、ソ連時代のポジティブな面よりも、「ソ連解体後の困難」を重視している。そのソ連解体後の困難は比較対象としてSCさんのソ連時代に対するイメージに影響を与えている。「先行研究」でも述べたように、ソ連時代に対するノスタルジーが強まる理由は、1990年代の経済的な状況に比べるとソ連の末期が「黄金時代」のように映るからである。そのような語りは、本研究の対象となった若者のインタビューにも見られた。

#### Case 3 SPb (F, 34, SC, ベラルーシ)

インタビュアー：また、ソ連についてお話ししたいです。どのような考え、どのようなイメージですか。「ソ連」という言葉を聞くと、何を想像しますか。

対象者：想像しにくいですね。当時は、子どもだったので、むしろポジティブなイメージですね。色々な困難、戦後の困難やスターリン時代などは、我々の世代と両親の世代には直接関係していませんでした。そし

て思い出すと、苦しかったのは、ソ連解体後のことです。皆、独立した頃は、商品不足で大変でした。私はちょうどその[認識し始めた - 筆者注]年齢になって、つまり6-7歳ぐらいだったのですが、牛乳やパンを買いたいなら並ばなければなりませんでした。オレンジが搬入されたら、並びます。何か搬入されたら、並びます。4-5歳の時は、そのような感覚がありませんでした。そして小さかったので商品不足などのような日常生活の困難は、子どもの私には関係ありませんでした。また、[ソ連解体後 - 筆者注]両親は、常に不安だったような気がします。なぜかいつも「お金がない。仕事がない」という話ばかりでした。[...]当時、町の中心的な大工場(градообразующее предприятие)は、綿がないと稼働できませんでした。

インタビュアー：当時はどこにいましたか。どこの国でしたか。

対象者：ベラルーシでした。ウズベキスタンからの綿の供給が停止してしまい、なんか全てが大変になって、両親は、仕事がない時が多かったです。ソ連解体後の時期は、子ども、少年、高校時代に当たっていて、その頃「行列」と「貧困」と「節約」が特徴だったことを覚えています。1990年代末は少し楽になりました。それで、両親は常に「ソ連時代はああった、こうだった」と[懐かしそうに - 筆者注]思い出していました。

ソ連が解体した頃、SCさんは8歳であり、小学校の2年生であった。それ以前のペレストロイカ時代の困難は、子どもであったSCさんの記憶に残っておらず、ソ連解体後になってから日常生活が大変になったという認識がある。ソ連解体後は「行列」を連想し、商品不足の問題が浮かび上がる。商品不足の問題は、ソ連の歴史には常に存在しており、1917年の社会主義革命後、1930年代、第二次世界大戦後は商品分配の整理券制度が導入されたことがある。しかし、1987-1990年は、商品不足の問題がそれまでのスケールを超えて深刻な問題となった(松戸、2011)。商品不足の原因は、計画経済の計算ミスだけでなく、商品分配へのアクセスがある人の責任でもあったとされる。なぜなら、不足している商品(дефицитные товары)が販売店にあってもそれらの商品を自由に販売せず個人のコネクションなどを重視し販売されたからである。一方、「不足した商品」が販売店に届いているという噂が広まると、その店の前に何千人もの行列ができあがった。このような商品不足の問題は他のインタ

ビュー対象者によってもソ連時代の特徴として頻繁に取り上げられたが、SCさんにとってはその問題がソ連解体後の特徴として記憶に残っている。当時、小学生となったSCさんは両親同士の話を聞き、両親の不安を感じ取っていた。そのような子どもの頃の思い出は、ソ連時代に関する情報源となっている。SCさんは、当時、ベラルーシにいたが、そのような経験は、おそらくベラルーシ特有の問題ではない。SCさんと年齢に近いサンクトペテルブルク育ちの本稿の筆者も同じように子どもの頃の「感覚」として、「商品不足」と「行列」と「不安」が残っている。

次に、ソ連解体後はウズベキスタンにいたSNさんの語りを紹介したい。SNさんは、ソ連が解体した頃、2歳であったため当時の記憶はないが、両親の話、本や映画を元にソ連に対する考えを構築している。

#### Case 15 SPb (M, 28, SN, ウズベキスタン)

インタビュアー：ソ連についてどうお考えですか。どのようなイメージですか。ポジティブなイメージなのか、ネガティブなイメージなのか教えてください。

対象者：私は、ポジティブなイメージの方が強いです。私は、ソ連の末期に生まれたので、はっきりとは覚えていません。皆が独立した、ペレストロイカ時代に育てられました。それ[ソ連解体後-筆者注]は、とても苦しい時代だったと思います。90年代は、私の両親は、皆、とても大変だったと言っていました。国家制度が変わってしまい、それに適応せざるをえませんでした。独立の過程は、全体的にとっても苦しかったです。両親の話によれば、90年代はとても苦しい時代だったそうです。ソ連時代については、両親の話と、本に読んだことと映画で見たことしかわかりません。それはいい時代だったと思います。なぜなら、全ての面で安定(определённо)していたからです。つまり、教育、医療と仕事の全てがありました。全てがよく管理されており、よく機能していました。今は、あらゆる面で、少し難しくなりました。なぜか前のほうが、全ての面でより良く管理されていました。汚職というものもなく、それは抑えられていたと言えます。とにかく、ソ連時代は、全てがよりわかりやすかったです。

ペレストロイカ時代は、ソ連末期（1987－1991年）であったが多くの対象者にとってはソ連解体と結びついているせいか、ソ連解体後の思い出と混同している。SNさんにとっても1990年代は、「とても苦しい時代」として映っており、それに対してソ連時代は「汚職がなくて」、「全ての面で安定」し、「よく機能して」おり、「全てがよりわかりやすかった」時代として捉えられている。その語りでは、当時ウズベキスタンにいたロシア人（ルースキー）の両親たちの世代における体制変化への適応の困難さが述べられている。

上述の事例から、近年のロシアの若者は、ソ連末期時代（ペレストロイカ時代以前）とソ連解体後の困難、そして近年のロシアの事情とを比較しており、ソ連時代の「安定性」や「正しい価値観」に対して憧れを感じていることが分かる。ソ連末期時代に生まれた世代は、子ども頃の思い出および「感覚」をもとに、ソ連時代を覚えていない世代は両親からの話をもとにソ連に対するイメージを形成している。

## 5－2. ソ連に対するアンビヴァレントなイメージ

アンビヴァレントな感情を抱いているグループは、ソ連時代のプラス面とマイナス面について語り、ソ連に対する考えに両面性がある。その語りの中で、「プラス面」と「マイナス面」として挙げられた要素に注目し、そのイメージの出所を分析したい。例として、ウラジオストクで暮らしている25歳の男性VLさんの事例を紹介する。VLさんはソ連時代のイデオロギーについて語っており、そのような「ロシア人を統一する」ナショナル・アイディアが現代のロシアには不足していると述べている。VLさんは、最初にソ連に対するポジティブなイメージを語り、「ノスタルジー」を感じていると述べているが、その後はソ連時代の迫害などの出来事について思い出し、最終的に「偏ったイメージはあまりよくない」と結論づけている：

### Case 12 Vlad (M, 25, VL)

インタビュアー：次の大きなテーマ、ソ連についてお話ししたいです。今は、ソ連についてはどのように考えていますか。どんなイメージですか。

対象者：私は、もちろん、ソ連時代に暮らしていなかったです。私が

生まれて間もなく、ソ連が解体されました。私は、その頃暮らしておらず、ネガティブな面を経験していないので、むしろノスタルジックな気持ちを持っています。何か良くて明るい感じです。映画や本に書かれているようなもの。なぜなら、ソ連時代の映画はとてもよくて、とても明るいです。子ども向けの映画とか、「エレクトロニク君の冒険《Приключения Электроника》」、「未来からのお嬢さん《Гостья из будущего》」など。つまり、わりと偏っているイメージです。スターリンによる大弾圧や商品不足(дефицит товаров)や商品分配の整理券(талоны)と行列(очереди)等々…海外渡航の制限、検閲、ジョセフ・ブロドスキーの迫害やボリス・パステルナークの迫害があったことは頭で理解しているのですが…その面では、はい、客観的に見ればプラス面とマイナス面が両方あった国です。だから、全てが良かったとか、全てが悪かったという偏ったイメージを作るのは良くないと思います。今のロシアには足りないところもありました。

インタビュアー：例えば？

対象者：例えば、私の意見では、やはり歴史番組や映画などで判断しているのですが、今ロシアではナショナル・アイディアや精神的な絆(духовные скрепы)を探し求めています。当時は、そのようなものがある種の形で存在していました。

インタビュアー：それは足りないところですか。ナショナル・アイディアというものが必要ですか。

対象者：難しい質問ですね。本当に難しい質問です。ナショナル・アイディアというものではありませんが、何かロシア人を統一させるものが必要だと思います[...]

VLさんは1989年生まれのため、ソ連が解体した頃は2歳であった。VLさんは、「ソ連時代に暮らして」いなかったため、「ネガティブな面を経験」していないので、ソ連に対するポジティブなイメージを持っていると最初は語っている。VLさんの語りから、何かに対してノスタルジーを覚えるためには、必ずしもその何かを経験する必要があるわけではないことが分かる。むしろ、ネガティブな面を経験していないことによってノスタルジーをより感じやすいことが明らかになる。VLさんは、ソ連

時代の「マイナス面」を意識しており、「頭で理解している」と語っている。このような「頭で理解している」ことを言い換えると、「心には響かない」というニュアンスがあると思える。彼のソ連時代についての知識の出所は、本や歴史番組、あるいは子どもの頃に見たソ連時代の映画である。本や歴史番組という出所からソ連時代の歴史についてのネガティブな出来事も含めた情報を得たと考えられる。一方、プラス面として挙げられているのは、子ども向けの映画である。映画という情報源は、おそらく、感情的な関わりを求めているため印象に残りやすく、プラス面をより強く感じさせるのであろう。なお、VLさんにとって、近年のロシアにはソ連時代を「真似るべき」部分があるように考えている。それは「ロシア人を統一させる」何らかのナショナル・アイディアである。つまり、ソ連時代のイデオロギーは、国民を統一させるプラスの要因として考えられている。

次に、ウラジオストク出身の23歳の女性VJさんの事例を紹介したい。VJさんは母親との交流の中でソ連に対するイメージが形成されたことが分かる：

#### Case 10 Vlad (F, 23, VJ)

インタビュアー：ソ連については今どのように考えていますか。どのようなイメージですか。

対象者：そうですね。私はアンビヴァレントな考え (*неоднозначное мнение*) があります。私の母は「ソ連時代は良かった。ソ連時代はとても良かった！」と言っています。例えば、母は「学生のときに無料の夏休みの合宿 (практика)があった。ソチにも無料で行けた。二回も全くの無料でソチに行って遊んでいた。少しは仕事をしていたが、ほとんどは遊んでいた。休み時間の方が多かった。今はそういう制度がない」と言っています。あとは、大学卒業後の中央人材派遣制度 (распределение) です。つまり、私はしばらくすると卒業しますが、その後どうしたらいいか、どこに就職できるか分かりません。昔は、しばらくの間、決定している場所で働かざるをえなかったのが、「この分野でそのまま働きたい」、若しくは「分野を変えたい」と考える時間がありました。[...]しかし、正直

言って、私はソ連に戻りたいとは思いません。第一の理由として、海外などには行けなかったですし、第二に、定期的におこる食料品不足があったからです[...]でもソ連は間違いだったとも思いません。

VJさんは、23歳で大学3年生である。一年後卒業するが、就職に対する不安を感じている。2013年以降、ロシアは経済危機の影響で失業率が上がり、就職も極めて難しくなった。VJさんは、母親からソ連時代の暮らしの話を聞き、ソ連に対するイメージを形成している。その中では、ソ連時代に存在していた中央人材派遣制度（распределение）を魅力的に感じている。周知のように、ソ連時代は、大学を含む全ての教育が無料であったが、大学卒業後3年間は派遣された場所で働く義務があった。派遣される場所は、ソ連全土であったため生まれた場所、教育を受けた場所を離れざるをえないことも少なくなかった。しかし派遣された場所で住居が提供されることが多かった。今現在、住居が手に入れにくく、就職にも不安を覚えている若者にとって、以上のような中央人材派遣制度は魅力的に捉えられている。それと同時にVJさんは「海外に行けないこと」と「食料品不足」というマイナス面を意識し、「ソ連に戻りたいとは思わない」と語っており、アンビヴァレントな態度を示している。その意味では、VJさんはソ連時代を生きた世代の話を自分が置かれている状況と比較し、母親の意見と距離を置いて独自の結論に至っている。

もう一つの例として27歳の女性VHさんの事例を紹介したい。VHさんの語りから、若い世代が年齢の上の世代の話を聞き、その感情を内面化するメカニズムが浮かび上がる。

#### Case 8 Vlad (F, 27, VH)

対象者：ソ連に対し、ネガティブな連想は、もちろん、何もない。

インタビュアー：ありませんね。

対象者：ありません。ポジティブな連想も、基本的にはありません。ソ連とは、ただ読んだことがある、誰かから聞いたことがある時代です。ソ連は、「よくない時代であった」と私には言う資格がないと思います。

なぜなら、人々は今と異なる暮らしをしており、安定性があったからです。私は、そのような安定性を感じたことはありません。人から聞いただけです。たぶん、それはいいことであったと思います。そして、ある種の悲しみを感じています。その悲しみは、おそらく、他の人から移った悲しみだと思います。当時、暮らしていた人々、親戚とかが当時と今の暮らしについて話してくれるからです。

上述の語りから世代間の価値観継承のプロセスへのヒントが得られる。VHさんは、ソ連解体の1991年に生まれており、直接、ソ連時代に暮らした経験はない。1991年以降、ロシア経済は3回（1998年、2009年、2013年）も経済危機を経験している。ソ連時代の特徴として挙げられている「安定性」について、VHさんは自ら経験したことはない述べている。VHさんのソ連時代についての情報源は、本と年齢が上の世代の話である。そこでソ連時代に暮らしていた上の世代から聞いた当時の暮らしを体験したかのように感じる事が明らかになった。

上述の三人の事例をまとめると、アンビヴァレントなイメージを抱いているグループは、国民を統一させるナショナル・アイディアや社会保障制度が与えた安定性などの要因に注目し、ソ連のプラス面について語っている。しかし、それと同時にスターリン時代の大弾圧、商品不足、海外渡航の制限、検閲などの要因についても語り、全体的に見ると相反的な評価をしている。情報源としては、本、歴史番組、ソ連時代の映画や年齢が上の世代との交流が挙げられたが、その中で特にソ連時代の映画と上の世代との交流がソ連時代を体験したかのような気持ちを覚えさせることが分かった。

### 5-3. ソ連に対するネガティブなイメージ

最後に、ソ連に対するネガティブなイメージを抱いているグループについて述べたい。本調査では、ソ連に対するネガティブなイメージを持っている対象者は4人であり、その中3人はソ連に対するイメージ形成に影響を与えた情報源について述べていない。そのため、ネガティブなイメージを持つグループについては、データが許されている範囲で分析を行いたい。

先ずは、サンクトペテルブルクの30歳の男性SRさんの語りを分析する。SRさんは、第二次世界大戦の歴史に興味を持ち、ソ連時代の歴史も研究している。しかし、SRさんが参考している文献は、ロシア国外で出版されているものである。

#### Case 19 SPB (M, 30, SR)

インタビュアー：ソ連に対してどのように考えていますか。どのようなイメージを持っていますか。

対象者：私は、初めての社会主義国家としてのソ連がきらいです。1937－1939年[大粛清-筆者注]を忘れられません。なおかつ、私は第二次世界大戦の歴史に興味を持って[調べていますが-筆者注]、ソ連政府に関するネガティブなことをたくさん知っています。ソ連政府は、確かに我が国の産業化への大きな刺激を与えましたが、しかしとられた手段は非人道的だったと思います。それは、虐殺、1937年の大粛清そして血まみれの戦争です。[第二次世界大戦の時に-筆者注]2千万人の犠牲者が出たということは、[第二次世界大戦における勝利-筆者注]に対して議論の余地があります。今現在でもウクライナは、ドイツ軍に対し征服者や占領者ではなく、解放者だったと思っています。部分的に、10%ぐらい、私もその意見に賛成です。なぜなら、様々な文献—エストニアの文献を読めば—ソヴィエト軍ではなくてドイツ軍に入ったエストニア人が多かった[ことがわかります-筆者注]。そして、降伏した時もソヴィエト軍よりは、アメリカ軍に降伏した方が良かったらしいです…確かに、それ[第二次世界大戦-筆者注]は産業の発展を促しましたが、しかし1945－1947年の戦後の飢饉、そして犯罪率の高まりがありました。ニコライ二世は、第一次世界大戦に参加せずに、国内の問題を解決すべきだったと私は思います。そうすれば、今ロシアはヨーロッパのような先進国になっていたかもしれません。

インタビュアー：つまり、あなたにとってはソ連時代というものは、発展ではなく後退への一歩ですか。

対象者：もちろん、それは大きな発展の停止でした。孤立には何もない結果がありません。[...]今我が国が向かっているのは、そのような孤立であり、私はそれを歓迎しません。

SRさんは、ソ連が解体した頃、3歳であり、ソ連時代の思い出はないと思われる。しかし、SRさんは、「初めての社会主義国家として」のソ連に対するネガティブなイメージが強い。上述の語りでは、大粛清のシンボルとして使われている「1937年」、「虐殺」「戦後の飢饉」、「非人間的な手段」などのネガティブな出来事が挙げられており、プラス面として挙げられているのは、「産業化への刺激」だけである。SRさんの情報源は、上の世代との交流ではなく、歴史的な文献である。さらに、その文献は、ロシア国外で書かれたものであり、ソ連について批判的なスタンスをとっているものと考えられる。インタビューで言及されたのはエストニアの文献であるが、先行研究の節でも述べたように、エストニアはソ連の過去に対してネガティブなイメージを持っている人が多い。そのような立場は、エストニアで出版された文献においても反映されていると思われる。逆に、近年のロシアにおいては、第二次世界大戦におけるソ連の勝利が国民のアイデンティティ形成にかかわる重要な要因であり、「ファシズムから世界を救った国」としてソ連の役割がロシア政府によって強調されている。そのようなSRさんの第二次世界大戦の歴史解釈の再考は、現在のロシアにおける公式の歴史解釈に反している。インタビューの中でも、SRさんは、ロシア政府に対して反抗的な立場をとっていることが分かった。そのようなロシア政府に対する反抗的な考えは、第二次世界大戦に対する考え、そしてソ連時代に対するイメージにも影響を与えている可能性がある。

次に、ロシア極東のユダヤ自治州出身の22歳の男性VMさんの事例を見ていきたい。

#### Case 13 Vlad (M, 22, VM)

インタビュアー：ソ連については今どのように考えていますか。どのようなイメージですか。ポジティブですか。ネガティブですか。

対象者：ソーダ（炭酸水）。

インタビュアー：ソーダですか。

対象者：まあ、皆、ソーダ（炭酸水）がおいしかったと言っています。[...] どのようなイメージですか... 五か年計画ばかりを実施しており、常に何

かを計画している国です [皮肉な言い方-筆者注]。全体主義そのものを私は好きではありません。ソ連に戻れる機会があれば、私は「NO」といいます。

インタビュアー：どのようなネガティブなイメージが浮かびますか。

対象者：画一性、皆が同じような地味な洋服を着ています。食料品不足で、食料分配整理券で食べ物ももらいます。ネガティブなイメージが色々浮かびます。全体的に、「NO」といいます。

VMさんは、ソ連のポジティブな特徴として、「炭酸水」の販売機しか思い浮かばない。ソ連時代の炭酸水は、使い捨てのカップではなく、皆で共有するグラスに注がれて飲まれたため、ソ連時代の共同生活のシンボルにもなっている。また、マイナス面としてはソ連経済の根本的な体制の問題点（食料品不足、食料分配の整理券）が挙げられている。VMさんへのインタビューの中で、ソ連に対するイメージの情報源を聞き取ることではできなかったが、「皆、ソーダ（炭酸水）がおいしかったと言っています」というセリフから、日常生活についての情報を身内の人および知り合いに直接聞いたと思われる。また、VMさんが、ユダヤ自治州の出身であることから、ソ連時代に極東地域へ強制的に移住させられたユダヤ人とのコミュニケーションをとることで、ソ連に対するネガティブなイメージが内面化されたとも考えられる。

上述の二つの事例をまとめると、ソ連に対してネガティブなイメージを抱いている二人は、社会主義の体制、五か年計画の経済、第二次世界大戦の歴史、「非人間的な」産業化、虐殺、大粛清、飢饉、食料品不足などのネガティブな要因に注目している。プラス面としては、経済発展を促した産業化と炭酸水が挙げられたが、そのような要素は二人の全体的なネガティブな評価を変えるような影響がない。情報源に関しては、プーチン政権に反対な立場を取っているSRさんは、意識的にロシア国外で印刷された歴史的な本を選び、ソ連政府のネガティブな部分に注目している。一方、ユダヤ自治州出身のVMさんは、年齢が上の世代との交流を通じて、ソ連に対するイメージを形成していることが予想できる。その意味では、VMさんの事例は、ソ連に対するポジティブなイメージとアンビヴァレントなイメージを抱いている人と似ている。しかし、VMさ

んと関わりのある上の世代は、ソ連に対してネガティブなイメージを持ち、VMさんもそのイメージを内面化していると思われる。

## 6. 考察

近年、ロシアにおいてはソ連時代に対する関心が高まっているが、その過去の解釈に対しては共通認識が存在していない。ソ連時代に対しては、ノスタルジックな感情と相まって、そのネガティブな側面に対する認識も強い。このような傾向は、本研究が対象にした若者のインタビューの中でも見られた。ソ連時代を生きていた世代は、その中の一部の出来事や一部の経験を回想し、ソ連時代に対するイメージを構築している。一方、ソ連時代を生きていなかった世代は、ソ連時代の経験や思い出に頼らずに、ソ連時代を「再現」せざるを得ない。本稿では、ソ連の末期やソ連解体後に生まれた世代のソ連時代に対するイメージ、そのイメージを形成する要素、またソ連時代についての情報源を明らかにすることを目的とした。

インタビュー調査の結果から、ソ連時代に対するイメージを、三つのカテゴリに分けた。それらは、ポジティブなイメージを抱いているグループ、アンビヴァレントなイメージを抱いているグループ、ネガティブなイメージを抱いているグループである。

ソ連に対するイメージを形成する要素に関しては、ポジティブな面として挙げられたのが、国民を統一させるナショナル・アイディアや価値観、ソ連時代の社会保障制度および「安定性」（安定した仕事、安定した給料、中央人材派遣制度、年金保険、無料の教育、医療、保養地休暇の権利、無料の居住場所提供など）である。ネガティブな面として挙げられたのは、「迫害」、「経済的な発展の遅れ」、「グラーク収容所」、「プロパガンダ」、「海外渡航の制限」などである。また、ソ連時代に対してポジティブなイメージを抱いているグループも、アンビヴァレントなイメージとネガティブなイメージを抱いているグループもソ連時代のプラス面とマイナス面を両方意識している点は興味深い。様々な要素を意識している中で、最終的に評価がなぜ異なるのか。そのメカニズムを明らかにすることが、今後の研究の課題となる。

最後に、ソ連時代についての情報源として挙げられたのが、年齢が上の世代の思い出、映画、歌、歴史学の文献、歴史番組であった。若い世代は、親などとの関わりを通じて、上の世代の考えを内面化している。または、上の世代の考え、映画、本から得られた情報を出発点とし、自分が置かれている状況と比較し、上の世代のイメージと距離を置いて自らのソ連時代に対するイメージを構成している。以上のように、先行研究で取り上げられていなかった点、つまり、若者のソ連時代に対するイメージが形成されるメカニズムについて示唆を得ることができた。しかし、それぞれの情報源がソ連時代に対するイメージに与える影響は、本研究のデータから明確にできなかったため今後の課題にしたい。

## 謝辞

本稿を作成するにあたり、貴重なコメントをしてくださったクセーニア・ゴロヴィナ講師に感謝する。

## 参考文献

- 大塚英志『仮想現実批評 ― 消費社会は終わらない』新曜社、1992年、218頁。
- 高岡文章「近代と／へのノスタルジー―近代化遺産と昭和ブーム―」『福岡女学院大学紀要』17号、2007年02月、111-124頁。
- 松浦雄介『記憶の不確定性―社会的探究』東信堂、2005年、265頁。
- 松戸清裕『ソ連史』ちくま新書、2011年、253頁。
- Ahmed, S. *The Cultural Politics of Emotion*, Routledge, 2<sup>nd</sup> ed, 2014, 276 p.
- Davis, F. *Yearning for Yesterday: A Sociology of Nostalgia*. New York: Free Press, 1979, 160 p.
- Etkind, Alexander. *Warped Mourning: Stories of the Undead in the Land of the Unburied*, Stanford University Press, 2013, 325 p.
- Zimmerman, T. *The Economy of Nostalgia: Communist Pathos Between Politics and Advertisement. Nostalgia, Loss and Creativity in South-East Europe: Political and Cultural Representations of the Past*, Palgrave Macmillan, 1<sup>st</sup> ed., 2018, 241 p.
- Абрамов, Р. Репрезентация советского в российской блогосфере:

- социологический взгляд. *Вестник Удмуртского Университета. Философия. Психология. Педагогика*. 2011. Вып 1, с. 40 — 47.
- Абрамов Р., Чистякова А. Ностальгические репрезентации позднего советского периода в медиапроектах Л. Парфенова: по волнам коллективной памяти. *Международный журнал исследований культуры*, Вып. 1 (6), 2012, с. 52 — 53.
- Завершинская Н., Завершинская П. Кинематографические «прочтения» советской эпохи как проекция воспоминаний и забвений современного российского общества. *Вестник ПНИПУ. Культура. История. Философия. Право*. 2017. № 3, с.13 — 19.
- Левада - Центр, *Ностальгия по СССР*, 2017. <https://www.levada.ru/2017/12/25/nostalgiya-po-sssr/> 2018 年 11 月 29 日閲覧
- Левада - Центр, *Ностальгия по СССР*, 2018. <https://www.levada.ru/2018/12/19/nostalgiya-po-sssr-2/> 2019 年 2 月 4 日閲覧
- Молчанова О. Искусство забывания, или ностальгия по советскому мифу. *Вестник РГГУ. Серия «История. Филология. Культурология. Востоковедение»*. 2011, с. 57 — 64.
- Мониторинг социальных настроений населения стран постсоветского пространства. Восприятие молодёжью независимых государств истории советского и постсоветского периода*. Некоммерческое партнёрство «Международное коммерческое агентство «Евразийский мониторинг»», 2009. <http://www.zircon.ru/upload/iblock/db3/090909.pdf> 2018 年 11 月 29 日閲覧
- Очкина А., К вопросу о социальной природе «Советской ностальгии». *Известия Пензенского Государственного Педагогического Университета им. В.Г. Белинского. Общественные науки*. № 28, 2012, с. 50 — 57.
- Правдина М. Советское кино как объект современной культурной рецепции зрительской привязанности. *Вестник общественного мнения* № 2 (100) апрель–июнь 2009, 114 — 126.
- Правдина М. Современный рынок советского кино: социокультурный анализ способов позиционирования DVD-продукции. *Экономическая социология*. Т. 11. № 2. Март 2010, 91 — 114.

Фокин А. Реликты и симулякры советского в современном российском медиапространстве. *Лабиринт. Журнал социально-гуманитарных исследований*, No. ½ 2016.